

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

バレーボールにおけるラリーポイント制とサイドアウト制の違いについての研究

米山, 一朋 / HAMAGUCHI, Junichi / YONEYAMA, kazutomo /
YOSHIDA, Yasunobu / 濱口, 純一 / 吉田, 康伸

(出版者 / Publisher)

法政大学体育・スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 = The Research of Physical
Education and Sports, Hosei University

(巻 / Volume)

25

(開始ページ / Start Page)

35

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

2007-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005077>

バレーボールにおけるラリーポイント制とサイドアウト制の違いについての研究

The research for difference of rallypoint system and sideout system on volleyball

吉田 康伸 (法政大学)

Yasunobu Yoshida

米山 一朋 (嘉悦大学)

Kazutomo Yoneyama

浜口 純一 (筑波大学大学院)

Junichi Hamaguti

Key word (キーワード)

Volleyball (バレーボール)

Revision rule (ルール改正)

Rallypoint system (ラリーポイント制)

Sideout system (サイドアウト制)

1. はじめに

スポーツ界のあらゆる競技、種目においてルールの改正が行われるたびに、その戦術や戦略は変化を起こしてきたが、過去においてはその目的は例えば攻撃戦術が先行した時に攻守のバランスを保つためなど、いわゆる競技力向上を目指して行われるものが大半であった。バレーボールでいえばコンピネーション攻撃という攻撃戦術が進みすぎた時に両サイドにアンテナを立てて攻撃の幅を狭めたり、ブロックのオーバーネットを認めたりといったものである。

その一方で近年においてはマスメディアを意識したルール改正が各競技で行われ、バレーボールにおいてもコートの色分けやカラーボールの使用、ラリーを続けさせる目的でサーブのネットインや第1球目のダブルコンタクト(ドリブル)の廃止などが行われてきた。

中でも試合時間短縮の目的で行われたラリーポイント制はバレーボールという競技がマスメディアのソフトとして関心を持ってもらうために出来たものといえる。

そこで本研究では1999年から導入されたラリーポイント制が従来のサイドアウト制と比較してどのような変化をもたらしたのかに観点を置き、ゲーム分析を通して考察していくことにした。

2. 研究方法

① 標本

本研究の標本は、ラリーポイント制が導入されてから3年目の2001年度秋季関東大学男子1部バレーボールリーグ戦のうち、VTR録画したA大学の10ゲーム、39セットである。

② 測定方法

本研究は、データを収集するためにゲームを一度ビデオ

テープに録画し、後日再生して私案の記録用紙に記録した。測定した項目は以下の通りである。

- ・ スコア
各セットのラリーポイント制による25点マッチのスコア(第5セット目は15点)とサイドアウト制によるスコアを記録した。
- ・ 試合時間
タイムアウトの時間を除いた各セットの試合時間を記録した。

3. 結果及び考察

表1 各セットのスコアと時間

()内はサイドアウト制での得点

第1試合 A大学対B大学		
第1セット	21-25 (8-11)	17分40秒
第2セット	21-25 (7-11)	18分10秒
第3セット	23-25 (10-11)	19分20秒
合計	65-75 (25-33)	55分10秒
第2試合 A大学対C大学		
第1セット	21-25 (9-12)	17分50秒
第2セット	25-12 (12-0)	15分20秒
第3セット	25-20 (12-7)	17分20秒
第4セット	25-19 (11-6)	18分10秒
合計	96-76 (44-25)	1時間8分40秒
第3試合 A大学対D大学		
第1セット	25-21 (9-6)	17分50秒
第2セット	23-25 (8-9)	18分50秒
第3セット	17-25 (6-14)	17分20秒

第4セット	18-25 (4-10)	17分00秒
合計	83-96 (27-39)	1時間1分00秒

第4試合 A大学対E大学

第1セット	22-25 (6-8)	17分20秒
第2セット	25-18 (9-4)	16分50秒
第3セット	22-25 (5-7)	19分20秒
第4セット	25-23 (4-3)	17分30秒
第5セット	17-15 (8-6)	13分40秒
合計	111-106 (32-28)	1時間24分40秒

第5試合 A大学対F大学

第1セット	25-23 (8-6)	19分40秒
第2セット	25-16 (11-3)	14分40秒
第3セット	25-21 (8-4)	18分30秒
合計	75-60 (27-13)	52分50秒

第6試合 A大学対G大学

第1セット	22-25 (7-8)	17分30秒
第2セット	25-19 (10-4)	16分30秒
第3セット	25-22 (8-6)	18分20秒
第4セット	25-22 (9-7)	18分50秒
合計	97-88 (34-25)	1時間11分10秒

第7試合 A大学対H大学

第1セット	26-24 (7-6)	18分50秒
第2セット	25-21 (11-4)	19分00秒
第3セット	21-25 (6-10)	20分10秒
第4セット	22-25 (9-11)	19分00秒
第5セット	14-16 (5-7)	12分50秒
合計	108-111 (38-38)	1時間29分50秒

第8試合 A大学対B大学

第1セット	25-23 (10-9)	17分20秒
第2セット	19-25 (8-13)	16分30秒
第3セット	18-25 (5-12)	15分10秒
第4セット	20-25 (5-9)	16分00秒
合計	82-98 (28-43)	1時間5分00秒

第9試合 A大学対E大学

第1セット	15-25 (2-13)	14分20秒
第2セット	25-22 (9-6)	18分10秒
第3セット	19-25 (5-12)	14分30秒
第4セット	20-25 (8-12)	15分50秒
合計	79-97 (24-43)	1時間2分50秒

第10試合 A大学対D大学

第1セット	20-25 (6-10)	17分20秒
第2セット	22-25 (6-9)	18分40秒

第3セット	22-25 (6-8)	17分40秒
合計	64-75 (18-27)	53分40秒

A大学4勝6敗(得セット17、失セット22) 最終順位4位

(1) 試合時間及びスコアの比較

まずモデルとなった大学の最終成績は8チーム中4位(4勝6敗、得セット17、失セット22)であり、全体的にみて25点制の中でほぼ20点以降のスコアでの攻防が展開されている(全39セット中28セット)ことから、実力的には同レベルの試合が行われたといえる。

その中で24対24のデュースとなったセットは1セット(26対24)しかなかったが、サーブ権がある時にラリーを制した場合のみ得点が入るというサイドアウト制でスコアをつけていくと、全てのセットにおいて勝ったチームが15点に到達していないことから、ラリーポイント制の当初の目的である試合時間短縮は確実に実現されていることがわかる。

フルセットまでもつれた表1の第4試合と第7試合の試合時間をみても1時間30分以内には終了しているが、サイドアウト制ではフルセットにもつれると2時間を越えるという試合がほとんどであった。

各セットの試合時間に関しても4セット目までの25点制ではほぼ20分以内、5セット目の15点制では15分以内に収まっている。したがって試合時間短縮と同時に、試合展開に関係なくある程度の試合時間の計算も立つようになったといえる。このことは試合をテレビ放映するメディアや会場を運営する団体にとって好影響をもたらした。

またラリーポイント制はいかなる局面においてもそのラリーを制したチーム側に得点が入るということから、試合をみる観客側にとっては非常に単純でわかりやすいルール改正であったといえる。バドミントンもラリーポイント制を導入したことからわかるように、各競技団体もメディアやスポンサー、ファンなどに関心を持ってもらうために時間短縮を目的としたルール改正が頻繁に行われるようになったと推測される。

ラリーポイント制が導入された当初は、例えばイタリアのプロリーグ・セリエAの試合において、あまりにも早く試合が終了してしまったため観客が入場料の返還を求めるケースなどもあり、国際試合においては1セットのタイムアウトが従来の各チーム2回・計4回から、どちらかのチームが先に8点及び16点に到達するとタイムアウトとなるものも加わったため、計6回といういかにも時間稼ぎと思われるようなルール改正も導入された。

そして表1の結果からもわかるように従来のサイドアウト制(1セット15点制)でのスコア換算では、全てのセットにおいて決着がついていない状態であるため、そのままサイドアウト制で試合を続行していればどのような結果に

なっていたかは全く予想できないといえる。

(2) 試合展開の比較

バレーボールではサーブ権を持っていないチームが、相手のサーブを受けて最初に攻撃をしかける機会が多いため圧倒的に有利であるといえるが、ラリーポイント制では例えば相手チームのサーブ権から始まり、自分のチームのサーブ権時に1点を取って、あとの24点を相手チームのサーブ権時に取れば25対23でそのセットを勝利することができる。

この場合従来のサイドアウト制では1対0というスコアであるが、これに近いものが表1の第4試合、第4セット目のスコアである。ラリーポイント制では25対23という接戦になったが、サイドアウト制では4対3というまだ序盤の局面で、これからどのような展開になるのかわからない状況である。

特にサイドアウト制では過去において、高等学校の全国大会で1対14から逆転、国内最高峰のVリーグで4対14から逆転というケースもあり、現場レベルの選手やベンチスタッフ、あるいは観客においても点差に関係なく最後まで気を抜けない状況であった。ただしお互いにサイドアウトを繰り返し点数があまりにも動かない展開になると、いわゆる「中だるみ状態」になり観客の関心がやや薄れる傾向もみられた。

一方ラリーポイント制ではどの局面においても必ずポイントが入るので、ある程度の予測が立てられるようになったが、20点以降の終盤の場面において4～5点離れた状況ではほぼ逆転が不可能であるため、勝敗における意外性はほとんどないといえる。

よって終盤の場面において1～2点差での攻防が展開され24対24のデュースなどにならない限り、スリリングな状況にはなりづらいルールといえる。

(3) 戦術、戦略面の比較

ラリーポイント制においては全ての局面で得点が入り、サイドアウト制と比較して早い段階で決着がついてしまうため、各チームとも序盤からトップギアで得意な攻撃パターンを展開するようになった。よってオポジットという高いトスを打ち切るエースプレーヤーにかかる負担が増え、その他の特にセンタープレーヤーなどにかかる負担は減ってきているといえる。

またサイドアウト制ではまずサーブ権を持っている場合、ラリーに勝った時にプラス1点、負けた時にはサーブ権が相手に移動するだけなので0点、逆に相手にサーブ権がある場合、ラリーに勝った時にサーブ権移動の0点、負けた時に相手に1点が入るのでマイナス1点という得点の入り方であったのに対し、ラリーポイント制では全ての局面でラリーに勝った場合のプラス1点が負けた時のマイナス1点という得点の入り方なので、1点に対する重要性（常に

±1点の2点分）が増したため、導入当初はサーブミスでも得点になることからサーブの威力が弱まると予想されていたが、緩いサーブでレシーブをきっちりとセッターに返球されて、相手チームからコンビネーション攻撃を仕掛けられるとほとんど防ぎきれない状態になるので、攻撃を単調にする目的でジャンプサーブなどのサーブの威力が導入前よりも増したこともあげられる。

あとは各チームが序盤から特徴を出してくるので、相手エースプレーヤーの攻撃パターンや得意なコースなどのデータによる分析がより高度化し、事前情報にプラスしてリアルタイムでの情報もコート外にいるアナリストとベンチスタッフが、無線で連絡を取り合い選手に指示を出すようになってきている。

4. 結論

以上のようにラリーポイント制とサイドアウト制について比較をしてきたが、特に技術面における新しい戦術というのは生まれてはこなかった。

ラリーポイント制になって大きな違いが現われたのは試合時間の短縮と試合展開が予測できるという点で、得点方法も単純でわかりやすくなった。また選手への肉体的負担も減ったため、例えば2006年の世界選手権大会にもスターティングメンバーで出場した日本男子チームの荻野選手など、35歳以上でもプレーを続けるというように選手寿命が延びたこともあげられる。

また1点の重要度が増したので、レフリーの微妙な判定が勝敗に影響をもたらし、1つのプレーそのものも常に得点機会になるため、よりダイナミックなプレーが生まれるようになった。

そして試合の展開上、1～2点差の競り合いが終盤まで続かないとスリリングな状況が生まれなくなったこともあり、なるべくラリーを続けさせる目的で、サーブのネットインやファーストレシーブのダブルコンタクト（ドリブル）の廃止などのルール改正が行われるようになった。

今後も様々なルール改正が行われると予想されるが、現場においては素早い対応が望まれるであろう。

参考文献

- (1) A・セリンジャー：「パワーバレーボール」ベースボールマガジン社
- (2) 池田久造：「バレーボール ルールの変遷とその背景」日本文化出版 1985年
- (3) カーチ・キライ：「カーチ・キライのパーフェクト・クリニック」日本文化出版 1987年
- (4) 清川勝行：「バレーボールにおける攻撃技術・戦術の歴史的発展と推移」日本バレーボール協会科学研究委員会研究報告集第IV巻 1988年
- (5) 砂田孝士ほか：「6人制バレーボールのルールと審判法」

大修館書店 2000年度版

- (6) 福原祐三ほか:「バレーボールのゲーム分析—サーブプレシ
ープからの攻撃—」日本体育学会第30回大会号
- (7) 松平康隆ほか:「バレーボールの戦術」講談社 1972年
- (8) 都沢凡夫ほか:「バレーボールにおけるゲーム分析」日本
バレーボール協会研究報告書第4巻
- (9) 吉田康伸ほか:「バレーボールにおけるフロントとバック
の攻撃パターンについての研究②」法政大学体育研究セン
ター紀要第17号 1999年
- (10) 吉田康伸:「バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術
の変化についての研究」法政大学体育研究センター紀要第
21号 2003年